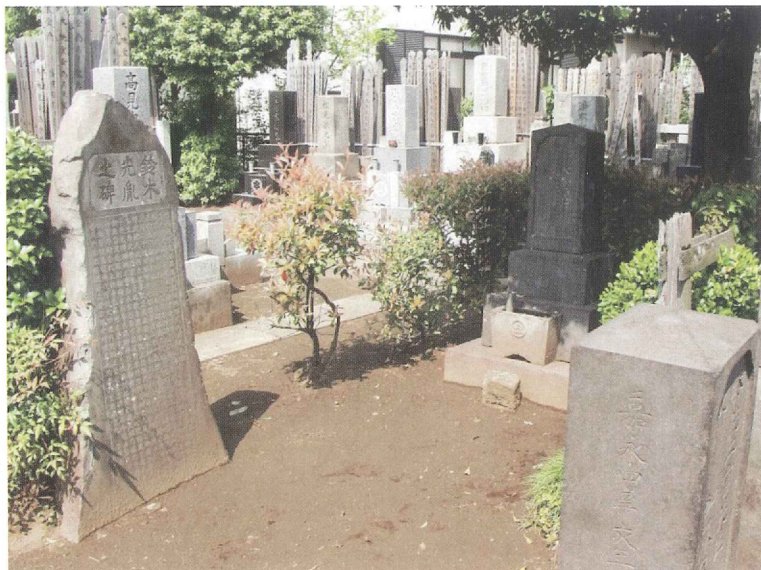


鈴木重胤の墓



〔登録年月日〕平成三年一〇月二八日  
〔種別〕史跡（墓・碑）  
〔名称〕鈴木重胤の墓  
〔点数〕一基  
〔所有者等〕個人  
〔所在地等〕和田一―四四―二四（長延寺内）

## 鈴木重胤の墓

総高一四一・二cm、安山岩の山状角柱型塔の墓で、三段の台石をともなっており、右側面には重胤の長男鈴木重兼の名が彫られ、正面は花頭飾の枠取りをして鈴木重胤、配二宮氏（妻寿美）墓と記している。台石には「丸に三星に一の字」の家紋が刻まれた水盤が置かれている。

幕末の国学者として知られた鈴木重胤は、文化九年（一八一二）淡路国津名郡仁井村（兵庫県津名郡）で生れた。幼名は雄三郎、通称勝左衛門と称した。本居宣長、平田篤胤の学を仰ぎ国学の研究に専心した。天保一四年（一八四三）には篤胤没後の門人となり、多くの著作のなかでは『日本書紀伝』『延喜式祝詞講義』の二書が特に敬重された。

文久三年（一八六三）八月、向島小梅町（墨田区向島）の自宅で暗殺され、妻の実家二宮家によって江戸市ヶ谷（新宿区）長延寺に葬られた。享年五二歳であった。

長延寺は万昌山と号し、文禄三年（一五九四）江戸市ヶ谷長延寺町に開創され、明治四二年（一九〇九）現在地へ移転、墓もその際移されたものである。

平田系の国学者として、幕末の国学界に一地步を占めた鈴木重胤の墓所を示すものとして重要である。

【文化財所在地】

